

論文審査の結果の要旨

論文題名

『うつほ物語』論——書かれたものの機能

論文審査の要旨

本論文は、長編物語『うつほ物語』（『源氏物語』より数十年前に成立）を、「筆跡」「書物」「手紙」「学問」等の「書かれたもの（エクリチュール）」という観点から分析し、かつ、そうすることで平安時代物語文学史の再構築を試みたものである。全十章（序章・本論九章）と資料編からなる。

まず『うつほ物語』全二十巻について概説しておく必要があるだろう。この物語は「俊蔭」巻と「藤原の君」巻という二つの冒頭部をもつ。「藤原の君」巻が「あて宮求婚譚」という祝祭世界を語っているのに対して、「俊蔭」巻は清原俊蔭が異郷に漂泊し、秘琴・秘曲を伝授されて帰朝したという艱難辛苦の物語である。対極をなす物語だが、「俊蔭」巻の俊蔭娘が、あて宮の求婚者の一人の藤原兼雅と結ばれ、二人の子仲忠があて宮求婚者になることで双方の物語は結合し、以下、この二つの異質な世界は互いを相対化しつつ有機的に統一化されていく。正頼主催の祝祭世界は陰謀渦巻く政治世界へと変貌し（「国譲」三巻）、俊蔭系物語では、俊蔭→俊蔭娘→仲忠→いぬ宮、という秘琴・秘曲伝授の系譜が完成したところでフィナーレを迎える（「楼の上」二巻）。以下、各章を紹介しつつ個別の批評を試みたい。

第一章「物に文字を書きつける」、第二章「書きつける」ことから見える言語認識では、紙ではなく、「物」それ自体に文字を書きつける行為が、あて宮求婚譚において頻出しており、それは言葉と現実の指示対象との結合を意味するとし、そうすることで言葉の呪力の回復がはかられているとしている。まさにこれこそがこの物語における祝祭の言語構造なのだという。また、さらにそのような観点から仲忠や実忠等の求婚者たちがどう語りわけられているかを論じている。あて宮求婚譚の祝祭性については、求婚という祭の時空が語りの対象であるから祝祭なのだとするのではなく、あくまで物語の表現構造の問題として論ずる必要がある。あて宮宛の贈歌がなぜ物に直截書きつけられたのか、それを祝祭の言葉の問題として見事に論じきっている。

第三章「書かれた手」、第五章「〈手〉の相承——文字の伝授と〈琴〉の伝授」では、この物語が「筆跡」をどう扱っているかを問題にする。筆跡により登場人物の階層化をはかっているというのがまず一つある。そして、とくに仲忠の筆跡が物語世界で果たしている役割を、琴の「手」との関わりで論じている。仲忠は東宮妃となったあて宮腹の若宮に「手本四巻」を献上する。仲忠の優れた筆跡は俊蔭家伝来のものだが（「蔵開」巻）、仲忠にとってそれはさほど重要なものではない。作成した手本を献上しても、清原家伝来の「書物」（「蔵開」巻で登場）は献上してないし、ましてや琴の「手」は秘しているからである。仲忠は手本を献上することであて宮との連帯をはかりつつも、あて宮は手本でなく、本当は琴の「手」の方を所望している

のだとし、この二人の間に溝が生じていくことの経緯、さらに音楽に至上の価値をおくこの物語独自の世界観を明らかにしている。音楽の系譜、学問の系譜、手跡の系譜、これらがどう序列化され、かつ物語の錯綜した人物関係を築くうえで、いかに各々が参与しているかの一端を摘出している。

第四章「紙に字を書く——手紙の機能」は、「手紙」というモチーフに注目した論。『うつほ物語』では、人間関係の拡大をはかったり、互いの信頼を獲得する手段として手紙が機能していると結論づける。これは密通露見という猥雑な役割を手紙に与えている『源氏物語』とははなはだ異なる手紙観であり、『源氏物語』の手紙とは何か、さらに物語文学と手紙との本来的な関係とは何かという問題提起の論たり得てもいる。

第六章「清原家の〈学問〉の〈系譜〉を担う仲忠——先祖が書いた書物と学問の継承」、第七章「清原家の〈学問〉の進講」では、清原家を音楽の家として確立するために、それを根拠づけるものとして学問の家の確立が必要であったことを論ずる。『うつほ物語』の掉尾を飾る「楼の上」巻で、都中をまきこんでの大コンサートが開催されることになるが、そのためには、その清原家の音楽の何たるかをあらかじめ確定しておくことが要請され、そのための天皇への書物の「進講」であるとする。かくして清原家の音楽は天皇家のお墨付きを得ることになるが、それは書物あってこそ初めて可能になったとする。また、その進講が歴史上の『日本紀』の進講をふまえて記述されていることの意味も論じている。音楽は単なる音楽ではなく、そこに歴史性を付与するものとして学問という枠が同時に準備されたとし、この物語における音楽の系譜と学問の系譜との関係構造を明らかにしている。第八章「〈琴〉の公開と〈学問〉の公開の場の論理——後半の巻々を中心に」でも、音楽と学問の論理との同一性と差異性とを論じている。

第九章「清原家の系譜の全てを担う仲忠と次世代の者たち」は、物語の最後の「楼の上」二巻を分析することで、音楽・学問・書物・手跡等の各系譜とは、結局のところ何であったのかを確定した論である。秘琴・秘曲を相承したいぬ宮は、将来（物語の語られざる未来）は入内するだろうといわれているが、梨壺腹の皇子との関係も仄めかされていて、先行きは不透明であるという。そもそも秘曲・秘琴の系譜は、清原家唯一の生き残りの俊蔭娘の死が暗示されている以上、このいぬ宮で打ち止めなのかもしれない。学問の方は小君が相承することを物語は強調しているようだが、これも必ずしもそうとはいえないとする。書物についても手跡の系譜についても曖昧なまますえおかれている。物語のフィナーレでは、俊蔭娘・仲忠・いぬ宮による琴の大演奏会が開催され、都中の人々をエクスタシーの世界へと誘うが、このような一回的な音の現前により、物語をこれまで支えてきた系譜という認識そのものが相対化され、かつそれは遠景化されてしまったのではないかとする。『うつほ物語』という長編物語の最後をどう読むかは重要な問題であり、先行研究も多いが、武藤氏の論はもっとも妥当なものとして評価される。

従来の『うつほ物語』研究史において、琴の問題については、再三にわたり論じられてきている。しかし、本論文は、音楽のみならず、清原家の「手跡」「書物」「学問」の系譜の所在をも確認し、かつそれが音楽の系譜をいかに支えているかを検証することで、『うつほ物語』像の再構築を試みている。音楽はそれ自体では自立し得ないということなのだ。音楽は、「今・

ここ」での一回的な演奏として現象するしかなく、学問の系譜、書物の系譜等の書かれたテキストがあつてこそそこに歴史性を刻みこむことができる。とはいえ、「今・ここ」の一回的現象だからこそ音楽には至上の価値があるともいえるわけであり、その意味で歴史なるものは早晩撤退することを余儀なくされることにもなる。このような本論文の『うつほ物語』理解はもつとも評価できる点である。

また本論文が提出した「手紙」「手跡」「学問」「音楽」という諸問題は、『源氏物語』研究や平安文化研究にとっても大変重要なものだが、これまでの研究は、『うつほ物語』の存在を度外視したところで立論されていた。しかし、本論文により、『源氏物語』は明らかに『うつほ物語』の達成をふまえて成立していること、また平安時代の文化の実態を考えるには、『源氏物語』以上に『うつほ物語』の方が情報量豊富であることが実証されたのである。本論文の登場によって、今後きめの細かい研究が可能になるものと期待される。

最後に一言注文をつける。『うつほ物語』という平安時代の物語文学は、口承という音声言語それ自体ではなく、あくまで書かれた物語として存在している。「手紙」「書物」「学問」「文字」「手跡」等の書かれたものが、音楽なる「音」を支えているという本論文の主張を認めるならば、それは同時に、パロールでしかあり得ないはずの物語がエクリチュールとして存在していることへの自己言及たり得てもいるのではないのか。本論文を「書かれたものの機能」と銘打っている以上、そこまで問題を追い込む必要があるのではなからうか。

以上を以て、武藤那賀子氏の論文が博士（日本語日本文学）の学位にふさわしい業績であることを審査員全員一致で承認した次第である。

以上

論文審査委員： 主査 神 田 龍 身 教授
鈴木 建 一 教授
阿 部 好 臣 特別非常勤講師
(日本大学文理学部教授)